

“お互いの無知こそが最大の障壁”

—— 日米ロータリー友好会議略報 ——

去る6月11～12日米国テネシー州オークリッジで、日米ロータリー友好会議が開かれました。この会議は同市創始50周年記念事業の一つとして、オークリッジRCが発起、ロータリー財団との共同主催、オークリッジ・ブレックファストRCおよび地元第6780地区の協賛で行われたものです。RC財団はこの会議に26,920ドルの特別補助金を供与しました。

日本からは16地区の78人（ロータリアン60人、ゲスト18人）、全米25地区から210人（ロータリアン107人、ゲスト103人）合計289人（スイス1人含6月17日現在集計）のロータリアンとそのゲストが参加。主な参加者としては会議の名誉共同議長の松本卓臣、R、シュワルツ両RI理事、伊藤義郎元RI理事、地元RCのJ、タイトル、J、ハフィーの3人の共同議長ほか、R、バース次期RI会長（当時）、C、ケラーRC財団管理委員長（元RI会長）、J、ボーマー、H、アーチャー両元RI会長、W、サージェント、中島治一郎両RC財団管理委員（両氏とも本友好会議執行委員）ほか多数の元・現・次期RI役員が挙げられます。以下は会議の略報。

「メルボルン大会参加者約22,000人のうち、米国から約4,900人、日本から約3,200人。この2カ国だけで同大会参加者の40%近くを占める。日米はこのようにロータリーにおいても大きな力と役割を持っている。その力をさらに活性化するため、日米一層の友好協力を期待する。スイス人としての私は“中立的立場、からこの会議を見守りたい”

会議の初日、J、タイトル、伊藤義郎両共同議長、州選出M、ロイド下院議員の歓迎のあいさつとC、ケラーRC財団管理委員長による財団の平和プログラムについての講演の後の基調講演で、R、バース次期RI会長（当時）は、上記のように述べました。

この後J、ボーマー元RI会長が登壇、故向笠広次元RI会長をしのび「ロータリーがもし今日ほど強大であったなら“パールハーバーは起きなかっただろう”と故会長が生前しばしば語っていたと述べ“人類はひとつ、世界中に友情の橋をかけよう、と提唱して、世界理解の増進に献身した故向笠会長の遺徳をたたえました。

栗山駐米大使が講演

次はこの友好会議のハイライト、栗山尚一駐米日本大使の講演でした。『日米文化の相違と相

互理解と尊重』のテーマで行われた同講演の中で大使は要旨次のように語っています。「日米は貿易上のバリア（障壁）についてはしばしば論じ合っているが、感情的心理的バリアが取り上げられることは極めてまれだ。問題なのは人間の心の中にある“無知、というバリアである。無知は不信と偏狭を生み、ついには相互拒否をもたらす。今、米国人の中に“日本は世界を乗っ取ろうとするエコノミックマシンだ。信用できない、という気持ちが強まりつつある。一方日本人の中には“不器用な米国人は世界の変化に適應できず、自国のやり方を他国に押しつけようとしている、という恨みにも似た感情が生まれている。…最近の諸調査によると、日米両国民はお互いに相手をパートナーとしてよりも、むしろ脅威と感じる傾向が強まっている。もっと相互理解に努めないと、両国の関係は危険な方向に向かうだろう。日米摩擦の多くは実際には、相互の文化の相違とそれに対する無知が生み出していると私は信じる…」と。

そして大使は“儉約、正直、勤勉、教育、強い家族の絆^{きずな}など、日本で通用していることは世界のどの国でも通用する、というある米国人ジャーナリストの滞日体験談を引用した後、最近ルイジアナ州で起きた日本人高校生射殺事件に

触れ、“どうしてこの米国人が少年を撃とうとするほど強い恐怖心を持っていたのか、それが理解できない、と報じたある日本人記者の報道記事を挙げ、「この事件が米国文化そのものを示すとは信じないが、同記者の気持ちは日本の文化そのものを示している。秩序と調和を旨とする日本の社会は、恐怖からの自由を重んじる。米国の主張する一層創造的な個人主義を受け入れるには、調和ということが引き換えとなる」と主張しました。

大使はさらに日米文化の相違を象徴する一例として「米国では来客に飲み物を出す際には、必ず客の好みを聞く。しかし日本では黙ってまずお茶を出す」と文化の違いを強調。同質的日本社会で“アウトサイダー”が“インサイダー”になるのは、開放的な米国社会よりも難しいと認めながらも“郷に入っては郷に従え、とのことわざを引用して、理解を求めました。

そしてまた大使は最近米国下院のWednesday Groupが行った、在日米国企業についての下記調査結果——(1)調査対象企業の約30%強が日本で“インサイダー”として成功(2)同じく70%が、長期間の努力なしに日本市場への参加は困難としながらも、閉鎖的だとみなす企業は11%にすぎない(3)一方、77%が日本ではほかの先進国よりも文化の違いが大きなバリアになっている——を引用し、文化の相違が無視できないことを強調しました。そして「日米両国の文化が合流することはあり得ないだろうが、両国の経済が合流するためには、文化の相違をお互いに受け入れる必要がある」と主張「そのためにはこの友好会議のような民間レベルの交流が広い範囲で行われることが大切だ」と締めくくり、多大の感銘を与えました。

パネル討論が4回

この後2日間にわたる、4回のパネル討論に入りました。討論は4つのテーマ別に日米双方がリーダー、モデレーター、パネリストをそれぞれバランスよく出し合って行われました。以下にその要点をかいつまんで紹介します。

パネル討論(1)の“日米ロータリーの現状、で



6月11日オークリッジ大学連合会ボラード講堂で行われた開会式であいさつする伊藤義郎日本側代表。

は、モデレーターの松尾明PGが「人類最初の原爆被災地広島で1988年11月に行われたR財団主催第4回平和会議のホスト委員長を務めた私が、今その原爆発明の地オークリッジでの日米友好会議に出席していることに深い因縁を感じる」と述べたことが印象的でした。パネリストの一人玉村文夫PGは「関東大震災直後、RIそして米国はじめ諸外国のロータリーから当時のお金で約9万ドルもの義援金が送られてきた。これが創始間もない日本のロータリーを奮起させ、その後のロータリーの発展につながった。現在日本のロータリーが、海外の地震被災者あるいは動乱の難民に惜しみなく義援金を出している裏にはこのような歴史的背景がある」と述べました。フロアのケラーRC財団委員長から「日本のロータリーは財団の奨学金プログラムには極めて熱心だが、3-Hそのほか財団の人道的諸プログラムにも一層の協力をしていただけないか」と質問があった時、同じフロアの中島財団管理委員が立ち「日本人が税金の形で拠出しているODA（政府開発援助）は今、金額では世界一。また日本のロータリーは年間約900人の在日外国人学生に毎月相当額の奨学金を出している。このように日本はR財団のお金で日本人学生を海外に留学させることだけに熱心ではない」と反論。また玉村PGからも、日本が伝統的に学生を海外に留学させることに熱心な理由について、明治以来の歴史的背景の説明がありました。

一方、岡島哲之助PG（パネリスト）は、米国人のフロンティア精神をたたえつつ「米国が

自己主張の世界であるのに対し、島国で単一民族の日本は以心伝心、特に相手の主張に反対するときは極力婉曲な表現を使う。米国が主張の文化であるとすれば日本は妥協の文化、察しの文化である」と日米文化のギャップを比較解説しました。

パネル討論②の「国際理解と平和促進の手段としてのロータリープログラム」では、パネリストのJ.ネルソンPGが「日米間の文化の相違は非常に大きい。米国は歴史的に欧州とのつながりが強く、交流もやりやすい。若い人はまだ欧州の言語に関心を持つ割合が多く、日本語については少ない。しかし最近では日本語を学ぼうという人も少しずつ増えている。GSEのように5～6週間の短期プログラムでも、参加者に極めて強い影響を及ぼしている」と述べました。

オークリッジに日本の梵鐘

パネル討論③の「ロータリーの内外での友好関係と成功しているプログラム」では、パネリストのエド・ネフェーオークリッジ市長が、原子力研究所の所在地茨城県那珂町と同市が姉妹都市となっていると述べ、この姉妹関係が国際理解と友好に多大に貢献していることを、数々の事例を挙げながら強調しました。岩澤宗徹パネリスト(京都西・梵鐘製造)は、オークリッジ市50周年記念事業の一環として、市内に日本の鐘楼を建立する計画があり、市民の募金運動が進んでいる。梵鐘製造は奇しき因縁で岩澤会員自身が受託、今年8月の原爆投下記念日に開

開会式でロータリーソング「スマイル」の合唱の後、拍手する参加者。12日の開会式の際には「手に手つないで、が日本語で合唱されました。



に合うよう製造中であると述べて感動を呼びました。

富永雄幸パネリスト(PG)は、佐世保南RCが中心となって加州サンディエゴ港と佐世保港との姉妹港湾関係およびサンディエゴRCと姉妹クラブ関係を結んだことをはじめ、佐世保北RCが米国加州Kearny Mesa RCと姉妹関係を結んで国際友好の実を上げていること、そのKearny Mesa RCと共同でメキシコのTijuana RC向けに世界社会奉仕(WCS)を実施したこと、その他多くの国際友好活動の事例を紹介しました。

K.アドマン元RI理事(パネリスト)は「青少年交換は相互理解に極めて有効。現元青少年交換学生の氏名住所と現況などのデータを作って活用してはどうか」と提案しました。W.トルバート会員(パネリスト)は1992-93年度GSEチームのリーダーとして第2580地区(東京・沖縄)を訪問した際の体験談を披露し「栗山大使の発言にもあるように、世界貿易の大きなバリアはお互いの無知である。それをなくするのにGSEは極めて有効だ」と述べ、今後訪日する人々の参考になる事柄を幾つか伝えた後「日本は数千年の歴史を持つ国で、日米文化の差は大きい、多くの共通点も発見した」と語りました。そして「沖縄の嘉手納米空軍基地を訪問した際、米国側ホストが「日本は防衛費をあまり負担していないと言われているが、それは事実とは異なる。日本は多大の防衛費を負担している」と話していた」と打ち明け、さらに「日本については真実でないことがしばしば報道されている場合も少なくないので、留意していただきたい」と発言しました。

「日米経営管理の長所をミックスすれば、

パネル討論④「団体・企業間の国際協力の機会とそのモデル」では、その事例として日米の60の大学が協力交流を進めていることがリーダーのJ.バイゲル会員より紹介されました。その後パネリストのテネシー溪谷開発公社(TVA)のW.ウイルス元代表が戦後まもなくTVAが

日本の電源開発の研究者を受け入れたこと、現在も日米研究者の相互交流が継続されていること。石炭液化ガスの開発を日米共同で進めていることなどを明らかにし「世界各国と技術協力をしているが、日本との関係が最も円滑である」と述べました。

岡村俊一PG(パネリスト)は「私も若いころクリーブランドの自動車工場に技術研修を受けたことがある。戦後20年日本の製造技術の復興発展に最も役立ったのは米国の品質管理で、デミング賞もまだ日本には存続している」と述べました。

パネリストのE.シーマン テネシー・ジャパンセンター理事は「このセンターは、日米相互の理解と友好の推進を目的とするものだ」と述べ、日米相互事情紹介のニューズレターを日英両国語でそれぞれ発刊中、州と市の予算を受けてロータリークラブとの協力関係の維持強化、訪米日本人に必要な情報の提供、日米文化紹介の展示会の開催、日本人学童の補習授業の支援などを行っている、同センターの事業を紹介しました。

吉田盛次PG(パネリスト)は「終戦後フルブライトのおかげで日本人5,000人以上が渡米、米国の民主主義の理念を肌で学んだ。この恩を忘れてはならない。戦後の日本は米国の教育制度を取り入れ思い切った改革を行った。識字率はほぼ100%、大学進学率も極めて高い。しかし日本の教育の没個性化が今、問題になっている。創造力重視の米国の教育方針を取り入れる必要があるのではないか。その意味でロータリーの青少年交換、財団奨学金プログラムは大きな意義がある。国境を超えて教育、人道的事業を進めるロータリーは人類進歩の核となり得るものだ」と発言しています。

テネシー州地域経済開発のJ.グレッゴリー氏(パネリスト)は、日本企業の米国そしてテネシー州への進出について「日本の企業は1990年の時点で米国東南部だけで5万人以上の米国人に雇用の機会を与えている」と述べました。

盛田和昭PG(パネリスト)は「米国内で作ったものを日本など外国に輸出する日本企業が

増えている」とその種の企業名を挙げ「私の会社も加州モンテレーでワインを造り始め、日本に輸出している。在米日本企業のトップは米国人である場合が多い。日米経営管理の良い点をミックスしていけば、経済摩擦は解消するのは。テネシー州の日本企業はそのモデルだと思う。今後皆さんが日本で商売しやすいよう、日本側の許認可制を一層緩和するのに協力したい」と語りました。

財団同額補助金の日米共同活用を

この後「日米関係を深めるために、ロータリーアンとクラブがそれぞれの母国で何ができるか」を共同テーマとするワークショップ(研究会)がA B C Dの4グループに分かれて行われました。

このうちAグループでのやりとりを2、3かいつまんでお伝えします。参加者の中からケラーR財団管理委員長が立ち「日本のRCは最近中国にポリオワクチン供与のため約70万ドルを拠出したと聞く。また先年のメキシコ・シティー大地震の際には直ちに100万ドルもの義援金を送ったと聞いた。一方米国のRCは欧州やメキシコのRCと協力、財団の同額補助金を活用した事業を種々行っている。WCSの面で日米が同額補助金制度を活用協力すれば、より大規模なニーズにこたえられるのではないかと。そうすれば日米の協力関係がさらに深まるし、また最近財団が重点を置いている人道主義的プログラムが促進され、発展途上国を益することができのだから」との発言がありました。望月武義PGからも「日本からは財団同額補助金の申請はほとんどないと聞いている。もっと広報すべきではないか」との提案が出ました。これに対しリーダーの板橋敏雄アジア地域第1・第3ゾーンR財団コーディネーターは「私の任期があと1年あるので、ご要望に沿えるよう努力したい」との回答がありました。

B.クック元RI理事は「もし何かやることがあるとすれば、それは各人一人ひとりにかかっている。私は相互ホームステイを促進したい。

来年の台北国際大会の行き帰りに日本でホームステイできるようにしてもらえないか。私はR I 職業奉仕実行グループのコーディネーター(1992-93年度)でもあるが、類似の職業の会員を集める国際職業連絡グループ(International Vocational Contact Group=IVCG)がある。今回のこの会議中にこの種のグループをつくり、台北大会の際にホームステイをしたらどうか」との提案がありました。これに対し加藤恒七PGより「1969年のホノルル国際大会で50の職業グループに分けた部門別協議会が行われた。私は織物グループに出席した。その後19回国際大会に出ているが、こういう会議が行われた記憶はない。私としては、各人の事業職業の規模性質などに相応したこの種グループの結成と交流を推進していくべきだと考える」との発言がありました。

この後、再び全体会議が招集され、4つのワークショップでの研究討論内容の要約が各グループから発表されました。以下に4グループの主要発表事項を一括紹介します。

(1)相違点ばかりにこだわらず、共通点を確認し合おう(2)R財団同額補助金を日米共同で活用しよう(3)訪米日本人のホームステイの促進に努力する(4)IVCGの結成に努力する(5)この種の日米友好会議を継続したい(6)日本語が相互コミュニケーションのバリアだ。米国内の地区レベルで日本語の学習奨励に努力する(7)日本に留学する米国人学生を増やしたい(8)青少年交換を行うに当たっては、学生の選別を強化し、本人はもとより本人およびホストの両家族のオリエンテーションの必要なことを認識(9)GSE、青少年交換などで訪日する人々のためマニュアルを作成したいなどなどでした。

共同決議を公表

この後、日米友好会議参加者の意見希望をまとめた共同決議がこの友好会議の執行委員でもあるW. サージェントR財団管理委員より要旨下記のように発表されました。(1)日米ロータリアン相互の強固かつ永続的な友情を再確認する

(2)日米両国の文化についてお互いに最大限の理解と寛容を示すよう努力する(3)緊張は固い絆で結ばれている家族、友人あるいは地域社会でも起こり得る。日米ロータリアンはお互いを結びつける友情と相互依存関係が、両者を分裂させようとするいかなる力よりも強固であることを認識し、このような緊張を和らげるべく努力する(4)この会議に参加のロータリアンは各自のクラブ、地区そして母国で善意と理解と平和の絆を強め、それを全ロータリアン世界に広めること。その活動を行うに当たっては、(イ)相互の尊重(ロ)世界の諸地域で苦しんでいる人々のために人道的援助を行うべく協力する(ニ)ロータリアンの諸原則を適用して、問題の解決に当たるよう関係者を励ますこと(ホ)本会議参加者の中の日米同数のロータリアンで構成される運営委員会を設置するよう本会議の指導者に要望する。同運営委員会は今後の検討と活動の参考として、本会議での討論報告書の適切な活用を努める。

「前例のない会議だったが、

最後にこの会議の日本側代表で共同議長でもある伊藤義郎元R I 理事が登壇「この日米友好会議は前例のないことでもあり、また日米両国だけでよいのかということもあって、この1年間悩み心配してきた。地元スポンサー両RCのおかげで大成功に終わり感謝に堪えない。日米間の問題は多いが、ロータリアンとしてますます理解を深め合い、解決に助力すべきである。それが世界平和につながる。R財団とR I 理事会の多大な協力に感謝する」とあいさつをしました。

順序は前後しましたが会議期間中、ゴルフ、昼食会および地元ロータリアン有志結成のバンド出演の晩さん会、さらにホームホスピタリティが行われ、友好の雰囲気大いに盛り上げました。(注 この会議の名称を本誌4月号では日米ロータリアン親善会議と発表しましたが、会議のプログラムには日米ロータリアン友好会議と記載されていたので、これに倣いました)

参加してよかった!

—日米ロータリアン友好会議の感想—

参加者のほとんどが「大成功だった。参加してよかった」と異口同音に語っていましたが、日米10数人の参加者から感想をいただきましたが、紙数の都合でそのうちの幾つかを紹介します。

信念を行動に表した!

1993-94年度R I 会長

ロバート R. パース (スイス)

「行動に信念を 信念は行動に、が私の年度のテーマだが、この会議を実現した人々、参加した人々は何かをやらねばと信じ、それを実行したといえる。これから東欧でのロータリアンの会議に行くが、東欧諸国もそれぞれ問題を抱えている。この会議で得たものを東欧のロータリアンに伝えたい。R I 会長としての任務開始の前のよい勉強になった。ロータリアンに対する熱意も一層強まった。

今後の平和会議のモデルに

ロータリアン財団管理委員長

チャールズ C. ケラー (米国)

43年間ロータリアンとして数百回も国際的会議に出てきたが、この会議はその中でも最も有意義なものの一つだったと断言できる。

日米の緊張が強まっている今、ここで開かれたことに特に意義がある。今後世界で開かれるだろう平和会議のモデルとなるものだ。

知ってるつもりだったが

R I 理事

松本卓臣 (福山)

文化の違いをはっきりさせ、お互いにそれを認め合いながら友好の道を探る上で誠に有意義だった。率直に言い合ったおかげで、お互いに知ってるつもりで知らなかったことも分かった。

日本側のモデレーター、パネリストはよく勉

強してきたものと米側が感心していた。日米協力の事例が多く紹介されたのもよかったと思う。この種の会議を続けるかどうかは今後の課題だ。R I やR財団の公式プログラムとして認められれば、話は進むだろう。

会議を思い立ったのは

日米ロータリアン友好会議共同議長

ジョー E. ティトル (オークリッジ)

市の50周年記念委員会の委員長を務めている。2年前から記念行事に何をやるかと関係者全員が知恵を絞ってきた。何か永続的建設的な影響を生むことをやりたいと思った。そのころ日米経済摩擦が強まりつつあった。東西冷戦終了後に問題化するの日は日米関係だと考えた。日米両大国が一層仲よくやれば、世界のほかの国々にも建設的影響があると思う。それでこの会議の開催を決めた。日米のロータリアンは世界に対し大きな責任を負っている。R I 理事会とR財団の支援を感謝する。

2日間では短すぎる!

バスターガバナー

加藤恒七 (浜松東)

財団管理委員のサージェント(オークリッジRC会員)は私の親友だが、彼の思いつきで始めたことではないか程度にしか考えていなかった。来てみると地元RCのものすごい熱意に驚いた。会議の内容も予想をはるかに上回る質の高い、密度の濃いものだった。2日間では短すぎた。

取材感想——会議成功の理由の一つとして、専門の同時通訳が4人手配されたこと、発言予定者と通訳との打ち合わせ会が事前に持たれたこと、発言予定原稿が通訳側に渡されていたことが挙げられましょう。この種国際会議の成功に不可欠な要件として特記します。